

CKJSだより

第62号

校長 松平 昭二

shoji_matsudaira@hotmail.co.jp

主観と客観

子どもにどのような力を付けるか、その力が付いたかどうかをどう見とるかという「学力と評価」の問題があります。

そこで気になることがあります。目標に準拠した評価(絶対評価)は、教師の「主観」に基づく評価であり、信頼できないという見方であり、論調です。

その裏面には、集団に準拠した評価(相対評価)、さらにはそれを見てとるペーパーテストは「客観」的であり、信頼できるという主張が隠されています。果たしてそうでしょうか。

例えば、数学の場合、計算問題1問が解けたら5点が配点されます。これが応用問題を1問解いた場合には20点が配点されます。計算問題と応用問題の関係は、1対4の重み付けがなされています。

なぜ、1対4の重み付けなのでしょう。客観的に根拠を示せということになると、考え込んでしまいます。あえて言えば、まあこれぐらいでいいだろうという「主観」による配分です。もしくは、100点になるように割り振った配点の結果にすぎません。もちろん、その後の点数の始末は客観であるのですが。

もちろん、世の中もそれでいいと受け止めています。なぜでしょうか。それは、1対4に重み付けた教師の「専門的判断」を信頼したからです。そこに評価は成り立っているからです。

絶対評価は主観的、相対評価は客観的というのは大きな錯誤です。元はといえば、絶対評価は目標に準拠した評価、つまりその学年で付けたい力(目標)に対してどの程度力が付いているか(目標に到達したか)を図るものです。

正確に言えば、教育の専門家としての教師の「専門的判断」に依拠しているわけです。絶対評価においても、主観という言葉に惑わされることなく、自らの専門的判断に依拠して進めなければなりません。それは思いつきではありません。このことが理解されたとき、保護者の方からそして社会的信頼も獲得されるのだと思います。

本日、前期の通知表が手渡されました。担任からの熱いメッセージも述べられていますが、子どもたちへの励ましととらえてください。また、このことを通してお子さまと話し合う機会がもたれば幸いです。



※ 10月7日午後1時30分より、古本市と学習発表会の作品展示を事務所前廊下で開催します。保護者の方のご来校をお待ちしています。